

## ごあいさつ

本日は「第8回大阪チェロアンサンブル・mille定期演奏会」にご来場いただき、誠にありがとうございます。毎年1回の定期演奏会は、チェロを練習しながらの生活に1年を通じてメリハリを与えてくれます。「お客さんに楽しんでいただけるだろうか」と考えながら、今年は10人の作曲家の曲を選びました。実はチェロアンサンブルの苦勞の1つは「選曲」です。「弾きたい曲だけどチェロアンサンブルの楽譜がない」「楽譜はあるけど難しい。1年かけてチャレンジすれば何とかかなあ」などと悩みながら決めています。毎年、新しい曲に取り組んできましたので、今までに70曲以上演奏したことになります。さて、今年は団員が「ぜひ再演したい」という曲(曲目解説をご参照ください)を1曲入れました。すべての曲を、心を込めて楽しんで演奏したいと思います。ぜひ忌憚のないご感想をお聞かせください。今後の励みにして、益々、精進します。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。 団員一同

## 指揮者 佐々木 宏

桐朋学園大学音楽学部卒業。指揮を小澤征爾、秋山和慶、岡部守弘、高階正光の各氏に師事。コントラバスを江口朝彦、中博昭、奥田一夫の各氏に師事。在学中は桐朋学園オーケストラを指揮し研鑽を積む。卒業後、神奈川フィルハーモニー管弦楽団を経て、関西フィルハーモニー管弦楽団のコントラバス奏者として活動、在団30年の間に多くの世界的な指揮者、ソリストと共演を重ねる。その傍ら、創立当時の関西フィルで学生の為のコンサートの指揮を務めるなど、幅広く指揮活動を行ってきた。1993年夏、ザ・シンフォニーホールで催されたチャリティコンサートに於いて、在阪プロオーケストラの首席奏者で組織された記念コンサートを指揮し、好評を博す。アマチュアオーケストラの指導にも定評があり、宝塚交響楽団、西宮交響楽団等、多くのオーケストラと定期的な共演を重ねている。2012年3月関西フィルハーモニー管弦楽団を退団し、指揮活動に専念する。同年、自身の主宰する関西の若手演奏家を集めたアンサンブル、オーケストラパストラレを創設する。2013年7月から2017年7月までアンサンブルコスモリバティの指揮者を務める。現在、八尾フィルハーモニー交響楽団 常任指揮者、オーケストラパストラレ 指揮者、クレール管弦楽団 音楽監督 兼常任指揮者、河内長野フィルハーモニック常任指揮者、オーケストラEN常任指揮者、浜松市民オーケストラ音楽顧問。2014年から大阪チェロアンサンブル・milleを指導、定期演奏会の指揮は今年で5回目。



## 大阪チェロアンサンブル・mille(ミル)

2010年5月に広島で開催された「第4回1000人のチェロコンサート」に参加した関西の愛好家たちが集まり同年9月に結成。これまでの活動歴は、2011年5月岡山県笠岡市で開催された「第6回チェロアンサンブルコンテストin笠岡」第3位入賞、9月セプテMBERコンサート参加、同年10月に第1回定期演奏会を行い、今年で8回目。現在、団員は45名。mille(ミル)はフランス語で1000の意味。



2017年10月9日(祝・月)第7回定期演奏会 豊中市立文化芸術センターにて

# プログラム

## --- 第1部 ---

「フーガの技法」第1曲  
ニムロッド  
ハバネラ  
首の差で  
スラブ舞曲 第2集 第2番  
美しき青きドナウ

バッハ  
エルガー  
ビゼー  
カルデル  
ドヴォルザーク  
ヨハン・シュトラウス2世

## --- 第2部 ---

即興曲  
交響曲 第5番 第4楽章「アダージェット」  
交響曲 第3番 第3楽章より  
交響曲 第5番「運命」第1楽章

クレンゲル  
マーラー  
ブラームス  
ベートーヴェン



## < 曲目解説 >

本日の定演は第1部のテーマが「ダンス」、第2部のテーマが「シンフォニー」です。第1部の4つの舞曲はスペイン、アルゼンチン、ボヘミア、ウィーン各地の多彩なリズムの民族音楽です。第2部のドイツ系交響曲の王道をゆく3つの楽章は、いずれも壮麗な音の建築物です。チェロだけのアンサンブルでフルオーケストラの響きにどれだけ拮抗できるのか、ミルにとっては大きなチャレンジです。第1部、第2部を通して全体にもう一つ、「映画音楽」というテーマもあります。探してみてください。

### ---第1部---

#### ■「フーガの技法」第1曲

バッハ作曲

J・S・バッハ(1685～1750年)の全19曲からなる未完の大作の第1曲。「フーガの技法」はさまざまなタイプのフーガとカノンから成るバッハの対位法技術の集大成です。テンポや強弱などの表情記号が一切なく、楽器の指定もないというある意味で究極の自由音楽。それだけにどんな演奏も可能で、チェロ・アンサンブルで演奏しても何の違和感もありません。「お好きにどうぞ」と全てを受け入れるバッハ音楽の深さを感じます。

#### 【団員のつぶやき】

30数年前、当時流行りの会費制の結婚式。二人で入場する時に流す曲はこれだあ！と選んだのが「フーガの技法1番」。「シンプルなメロディが絡まった厳粛な雰囲気」が好きだった。当時の高揚した気持ちにタイムスリップしてしまう・・・。「初心忘るべからず」(笑)(3パート男。以下3男と表記) / 私がバッハを学んだラジオ「古楽の楽しみ」の磯山雅先生。――バッハの中では聖と俗が揺るぎなく健康的に一致している、だから極めて人間的でありながら、同時に神的な崇高さを感じさせるのだ――。今春急逝された先生を偲び演奏します。(4女)

#### ■ニムロッド

エルガー作曲

英国のエドワード・エルガー(1857～1934年)が作曲した管弦楽のための変奏曲「エニグマ変奏曲」の第9変奏です。「エニグマ変奏曲」は主題に14の変奏が続きますが、各変奏が友人たちの音楽的肖像で、それが誰かという謎(エニグマ)が曲名の由来です。ニムロッドは楽譜出版社の友人を指すようで、人柄をしのばせる気高くノブールな旋律は聴く者を癒します。オーケストラの単独のアンコール曲としてしばしば演奏されます。

レガティッシモ(最もレガートに)と書かれた28小節目から、喜びに満ちた音が悠久の大河のうねりのようにあふれます。3拍子です。数えながら演奏にご参加ください。(1女)

#### ■ハバネラ

ビゼー作曲

スペインを舞台に情熱的なロマ女性カルメンと竜騎兵伍長ドン・ホセラが織りなす悲恋劇を描いたビゼー(1838～75年)の人気オペラ「カルメン」。その第1幕でヒロインのカルメンが「恋は野の鳥」と歌い出す蠱惑(こわく)的なアリアです。スペイン音楽のイメージが強いハバネラですが、元々はキューバの民族舞曲(名称は首都ハバナに由来)。2拍子の緩やかな舞曲ですが、1拍目の符点のリズムに特徴があります。スペインでフラメンコと融合し、それがアルゼンチンに伝えられてタンゴのルーツになりました。

最初のメロディの弾き方を、日野先生は“妖しく”、佐々木先生は“誘うような感じに”と言われ、具体的にどう弾いたらそうなるのか悩みました。(1女)



### ■首の差で

ガルデル作曲

タンゴの名曲です。アルゼンチンの不世出のタンゴ歌手カルロス・ガルデル(1880～1935年)が映画「タンゴ・バー」(1935年)の挿入歌として作曲。曲名は競馬用語で、歌詞はわずか首の差で敗れた競走馬を引き合いに、恋の駆け引きにあと一步で敗れた男の話を歌います。浅田真央さんがフィギュアスケートで使った曲としても有名です。あとちょっとの所でうまくいかないことの多いのが人生。人の世の悲哀を漂わせた洒落たメロディーは一度聴いたら忘れられません。

変なタイトル!と思いネットで検索、『セント オブ ウーマン』のラストシーンで流れるタンゴでした。アルパチーノ演じる盲目の紳士が、失敗を恐れ踊るのをためらうお嬢さんに言うセリフ「タンゴには間違いはないよ、そこが人生と違うところさ」も素敵。スーパータンゴシーンを思い浮かべながらロマンティックに演奏します!(3女) / シュワちゃんが妻にさえスパイであることを秘密に活躍する映画『トゥルー ライズ』のラストシーンでもシュワちゃんが踊る!(1女)

### ■スラブ舞曲第2集第2番

ドヴォルザーク作曲

元はドヴォルザーク(1841～1904年)がピアノ連弾用に書いた舞曲集(各8曲からなる第1集、第2集)の1曲です。スラブ舞曲集は出版されると人気を博し、全曲を作曲者自身が管弦楽用に編曲しました。今やオーケストラの定番レパートリーで、中でもこの第2集第2番は憂いに満ちた名曲で、NHK「名曲アルバム」の放送開始(1976年4月5日)を飾った曲でした。

中学の音楽の授業で美しいこの曲に触れ、音楽を一生の趣味にしようと思った思い出の曲。その頃はまさかチェロアンサンブル用に編曲するなんて夢にも思ってもいなかった。本番でどのパートが一番美しく表現してくれるか楽しみです!(2男) / 昔から大好きな曲、ピアノの連弾でしか弾いたことがなく、いつかチェロで弾きたいと思っていたから感激です。(2女)

### ■美しき青きドナウ

ヨハン・シュトラウス2世作曲

ワルツ王ヨハン・シュトラウス2世(1825～99年)の代表曲で、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートの定番です。当初は男性合唱曲として作曲され、後に管弦楽版ができました。オーストリアでは「第2の国歌」として親しまれています。ちょうど日本の「ふるさと」のような位置づけの曲なのかもしれません。ドナウの緩やかな流れを思わせる序奏の後に、親しみのある5つのワルツが続きます。なおウィーンから眺めるドナウ川は茶色く濁っていて、指揮者ブルーノ・ワルターは「ドナウ川が青いのはシュトラウスのワルツのなかだけ」と言ったそうです。スタンリー・キューブリック監督の映画「2001年宇宙の旅」(1968年)で効果的に使われました。

各ワルツの出だしはかなりゆっくり振られるのに飛び出しそうで、想像すると心臓が飛び出しそうです。(1女) / 弦楽合奏ならチェロは最後まで伴奏、ダンスなら男役ですが、チェロアンサンブルでは主旋律がたくさん弾ける=女役ができる!ので新鮮で楽しいです。(1女)

## ---第2部---

### ■即興曲

クレンゲル作曲

本日唯一のチェロ四重奏用オリジナル曲です。ユリウス・クレンゲル(1859～1933年)はライブチッピ生まれのドイツ人チェリストで、門下にはフォイアーマン、ピアルティゴルスキー、齋藤秀雄らがいます。曲は讃美歌の荘厳な雰囲気から始まり、最後はなんと誰もが知るメンデルスゾーンあの曲(演奏をお楽しみに)で壮大に終わります。厳密には作曲者は「クレンゲル+メンデルスゾーン」とすべきですが、それだけクレンゲルにはメンデルスゾーンが身近な存在だったようです。というのも音楽家でもあった父がメンデルスゾーンの友人だったのです。

団員同士の結婚をクラッカーで祝福しようと企画したら、佐々木先生がノリノリでお二人の近くまで出向いて指揮してくださいました!(1女)



### ■交響曲第5番第4楽章「アダージェット」

マーラー作曲

ミルの今年の再演曲です。団員の強い再演希望があった理由は明解で、弾きながら感動するからです。ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画「ベニスに死す」(1971年)で使われて人気に火が付き、今ではマーラー(1860~1911年)の代名詞的な名曲です。原曲はハープと弦楽器だけで演奏されますが、本日の編曲ではハープをチェロのピチカートで代用しているのも聴きどころです。アッポジャトゥーラ(倚音)という非和音を効果的に使い、甘美な音のうねりを生み出しています。不安、混沌、狂気、苦悩を愛や陶酔にまで昇華したマーラーの音楽が現代人の心を捉えて放しません。

ミル立ち上げ初年の発表会から毎回聴きにきて「よかったわ」と言ってくれていた母が、今年の5月に亡くなりました。今年は観客席に母の姿はないんだなあ。今年のプログラムではどの曲が気に入るかなと考えながら練習しています。やっぱりアダージェットかな。(2女) / 団員の「再演したい曲」アンケート1位になった曲。「時間が伸縮する」とも評される不思議な符割りや細かなテンポ指示に悩まされ初演時は大苦戦。再演の今回、練習を重ねるごとに理解が深まっ……たかどうか、本番お楽しみ。(4男)

### ■交響曲第3番第3楽章より

ブラームス作曲

ブラームス(1833~97年)の4つの交響曲はいずれも傑作ですが、第3番では第3楽章が白眉です。しかも抒情的で憂いに満ちた冒頭のテーマをチェロが受け持つため、チェリストにはとても大切な楽章です。チェロ四重奏版ではこのテーマが各パートに順に出てきます。素晴らしいメロディーですが、これがなかなか難しく、楽器を歌わせるのに苦労します。フランスの作家サガンの「ブラームスはお好き」を映画化した「さよならをもう一度」(1961年)で使われました。

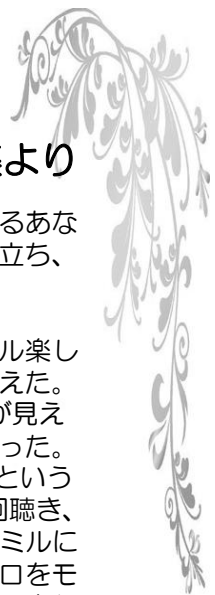
中間部に3パートメロディのハモリを奏でる部分があり秘かにハマっています。(3女) / 冬ざれた湖畔に繰り返し打ち寄せる三連符のさざ波、曇天の低い雲間から突然淡い金色の筋が差し込むけれど、それもまたすぐに雲に覆われ、一人風に吹かれていつまでも佇んでいる……そんな事を思いながら弾いていると少し涼しく練習できました。大好きな曲です。(1女)

### ■交響曲第5番「運命」第1楽章

ベートーヴェン作曲

ベートーヴェンの曲でと言うよりクラシック音楽で最も有名な傑作です。曲名は本日演奏する第1楽章の「ジャジャジャジャー」というたった4つの音の動機(モチーフ)を「運命が扉を叩く」とベートーヴェンが表現したことに由来します。指揮の佐々木先生いわく「どう言うこともない」動機がレンガを一つ一つ積み上げるように緻密に楽章全体を構築し感動を生みます。一つでも積み損なうと全てが崩れてしまいそうで、演奏していて一瞬も気を抜けない恐ろしい音楽です。かつて高名な指揮者が「運命」と「田園」の2大交響曲の演奏会で曲順を間違えて、「運命」を振り始めたつもりが、のどかな「田園」のメロディーが流れたという“事件”があったそうです。オーケストラ団員は指揮棒が振り下ろされる前に指揮者の勘違いに気付いていました。演奏前でも指揮者の全身から「運命」の持つ緊張感が伝わったからでしょう。100人の指揮者がいれば100通りの「ジャジャジャジャー」があって、その違いを聴くのも楽しいです。大きく分類すると「あっさり」系と「大見得」系に分かれます。さて本日の佐々木版「運命」はどんな「ジャジャジャジャー」でしょうか。

先生いわく“精密機械のように緻密で、寸分たがわずレンガを積み重ねた壮大な建築物のような音楽。そしてベートーヴェンの愛に溢れている”。レンガをスコンと抜かないように気をつけます。チェロだけで奏でる『運命』です。(1女) / 海外のサイトでアマチュアが今回の編曲の元になるチェロアンサンブル譜を公開しているのを発見した時「ミルと同じような事を考える人がいるんだな」と嬉しくなりました。きっと45人で演奏されるとは夢にも思わなかったでしょうが(笑)(2男)



## 2017年10月9日 第7回定期演奏会 打ち上げでの団員たちの「ひと言」集より

演奏を終え、美味しいご飯とお酒に機嫌よく盛り上がるひととき。当日は、毎年聴きに来てくださっているあなた様とゆっくりお話しすることができませんが、打ち上げの様子を覗き見てお楽しみいただけたらと思い立ち、紙ナプキンにメモを取ったものから、“解読可能”なものを紹介します。

なんで仕事よりしんどいことしてるんやろ、と思ってたけど、最近楽しくなってきた。みんなアンサンブル楽しいって言うけど、これか、と思った。／ アヴェマリアを弾き始めて、ずっと眠りに落ちたお客さんが見えた。／ 友達が、1曲目で涙が流れた、と言ってくれた。／ 感受性の強い友達が、天使が降りてきているのが見えた、と言っていた。／ 佐々木先生に、演奏者もお客さんもハーモニーの世界へ一緒に連れて行ってもらった。／ 昨年の打ち上げの場で、最後のコーヒーをもう一杯頂きたい(引退する前にもう1年、ミルを続けたいという意味で)と言ったが、まだもう一杯飲みたい。よろしくお願いします。／ 新曲が決まると、YouTubeで7回聴き、8回目は朝ごはんを食べている時に頭の中で流れるようになった。／ アメリカに転勤になったが、1年後ミルに戻ることを考えて楽器と先生を見つけて練習した。／ 鏡で自分の姿を見ながら練習をしたら、無意識に口をモグモグしながら弾いているのを見て練習する気がなくなった。／ 最初の曲アヴェマリアのとき天使が降りてきた。弾く前、無音の時から音楽が始まっていた。／ くるみ割り人形のトライアングルに任命され合宿(毎年9月上旬)から演奏。合宿が終わったらトライアングルだけ練習しようと思っていたら、合宿2日目に取り上げられてしまった(一同爆笑)。／ ペールギュントの『朝』を録音して聴いて思ったこと、「これ、朝？」演奏会3か月前のこと。／ 『オーゼの死』で小節の最後の8分休符はみんなが休符。みんなで呼吸していると感じた。／ 練習中は2ページ一緒にめくってしまったりと慌てて失敗することも。そんな私にミュート(弱音器)付けたか？外したか？など前や横から指令やら援助の手が。／ 「最初のアヴェマリアの出だしを聞いて、腕を上げたな、と思った」とアンケートに書いてあった。(場内喜びの拍手喝さい)／ 今年特に指導していただいた強弱、特にピアノの表現。演奏開始時のリラックスした場内の雰囲気、しばらくすると、息を止めて演奏を聴いてくださっているような、びんと張りつめた空気が変わった気がした。／ パート練習やりすぎの2パートです。お陰で、1パートよりも高音を弾くアヴェマリアを弾けるようになりました！！／ パート練習なしの1パートです。『朝』のアルペジオは練習曲としていいですよ。(と、コンマスから冷静な事務連絡)また来年は『ブラ3(※)』とベートーベンの『運命』をやります。(場内どよめき) ※下着のサイズではなく、ブルームス第3番の略／ 月1回の練習で気持ちよく弾いていたなら、横や後ろから弓でツツツン呼ばれたり時には楽譜に直接書き込まれる、「ここピブラートなし」と。まるで親にプープー言われているようで家族を感じる。死ぬまでよろしく願います。(ミルの演歌・義理人情係)／ 新たにミルの仲間に入り、毎月1回1年間、静岡から参加しています。これまで借りてきた猫でしたが、1回も休まなかったものでこれからは普通の猫になります。

### 団員たちがシビした佐々木先生のお言葉

●ミルには各自が自分の限界を破る気持ちで演奏することが必要！いくら間違えてもいいので、自信をもって練習してください！ そうすれば、ミルにしかできない素晴らしい音楽を見いだすことができます！ ●「何でもないと思うところに秘められた想いがある」 普段見過ごしてしまう箇所。先生のご指導で作曲家の想いが浮かび上がって来るのが面白いです。●「『チェロ奏者は包容力とバランス感覚に優れた博識者』と、ある音楽家が言っています。そこから醸し出される45人の美しいハーモニーです」(佐々木先生の励ましの言葉) ●普段は佐々木先生と向かい合っただけのご指導を受けていますが、先日オーケストラENの演奏を聴きに行ったとき、素晴らしい演奏を聴きながら、ミルでは決して見ることにできない指揮をする先生の後ろ姿に、演奏に対する熱い情熱を感じました。その時の思いを胸に留めたい。●前回の定演間近のある日、遅れて練習会場に着きドア越しに演奏を聴いて不安になった。入室するとやはり先生は厳しい表情。ところが休憩時にトイレで会うと表情は一変、笑顔で「楽しいですね〜！」と仰ったとき、音楽に対する思い、音楽に限らず人への愛、優しさ、上手く言えない大きなものを感じた。●「冒頭の2パートと4パートの5度の響きは憧れです」「この音は、たまらない小さなため息です」これらは今回のアンコール曲のご指導の言葉です。お楽しみに。

### 《編集後記》

旅先でゴッホの絵を、額のガラスを通さず、顔を近づけて食い入るように見た時、絵の具の盛り上がりなどからこの絵を書いた時の気持ちや勢いがそのまま残っていると感じた。それに比べて音楽は、はかないな。録音はできるけれど、録音でしか残せないのか。そんなある時、佐々木先生のご指導から気がついた。もし私が指揮者になったら(勿論仮の話)、ミルでのご指導いただいている表現や解釈は自分の音楽の一部となり口伝えていくだろう。と言うことは、佐々木先生の世界には先代の音楽が、先代にはそのまた先代の音楽が、脈々と受け継がれているのかな。そんな話を、トレーナーとしてミルをご指導いただいているチェリストの日野俊介先生に話すと、「(ゴッホの絵にあたるものは)楽譜でしょうね。楽譜が全てです。」確かにそうだ、そうやった！でも絵画は素人なりに鑑賞できるけど、楽譜は鑑賞できないから奏者が必要。さらにミルでは「運命」もチェロの運命にしてしまう。うーん、もしかして私たちは、音楽ならではのとても面白いことをしているのかもしれない。

